

## 倭寇おもろ : ヤマト、沖縄の文化的距離

著者	福 寛美, 吉成 直樹
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	4
ページ	1-39
発行年	2007-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022595">http://doi.org/10.15002/00022595</a>

## 倭寇おもろ

—ヤマト、沖繩の文化的距離—

## はじめに

近代以降、ヤマトの研究者たち、さらには伊波普猷をはじめとする沖繩の研究者たちは、沖繩文化とヤマト文化との間にある共通点を探すのに熱中していたと言っても過言ではない。ヤマト方言と琉球方言は姉妹関係にあり、日本語を共有するふたつの文化もまた同根であると考えられたことがその一番の理由である。一九七二年の沖繩の本土復帰を契機とした沖繩研究の熱気の只中にあつても健在だった「日琉同祖論」の残滓は未だに根強く継承されているかに思われる。

自らの歴史を十七世紀まで書き残さなかった琉球、鉄器を有しない琉球、水稻耕作の導入の遅かった琉球は日本の古代を残存させている、あるいは歴史的発展段階が遅い、という近代以来の根強い誤解が研究者を支配してきた。歴史を書き残す、という文字の文化を持つ時代が早かったヤマトが沖繩より優位である、という認識も大きな要因であ

福 寛 美  
吉 成 直 樹

ったことは想像に難くない。

しかし、中世の貿易決済貨幣として利用された「大錢」が出土し、朝鮮半島や中国の陶磁器を愛好していた琉球の人々の心性が古代のままではあるはずはない。

近代において琉球王国官制の神女祭祀をヤマトの研究者が発見したことによって、琉球には日本の古代があるという認識は決定的なものになった。祭祀において白い衣を着て勾玉の玉飾りを首にかけた高貴な女性によって霊的に支配される男性、というあり方はヤマトの研究者に卑弥呼、伊勢斎宮、賀茂齋院、などを想起させるには充分であった。女性が男性より霊的に優位であり、女性が男性を霊力で守護する、とする琉球王国の祭祀文化の残影はヤマトの研究者を魅了したのである。

さらに、琉球で発見された姉妹の兄弟に対する霊的優位、すなわちおなり神信仰も日本の古代にあったに違いない、という理解がヤマトの研究者の一部を支配することになった。記紀万葉の同母兄妹や姉弟の近親相姦や愛情物語をおなり神信仰という文脈の中で説明しようとする研究が近年においてさえも認められる。

しかし、仲原善忠が述べるように、神女の玉飾りの玉は、中世の京都の数珠の転用であった場合もあった（仲原、一九九七、二二五）。玉をヤマトへ買いに行く、というおもろがあるように、中世の琉球はヤマトの物質文化に深く馴染んでいた。また、琉球王国の神女は「神女職」に就いていたのであり、その役職によって俸給を支払われていた。官僚としての神女が、古代的な存在でありうるのだろうか。

琉球、沖縄研究に求められる視点は、沖縄にヤマト、中国の影響を探る以前に、沖縄を沖縄それ自体として見ることである。数多くの文化複合が混在している沖縄を「日琉同祖論」や「古代日本残像論」で説明できるとは思えない。ヤマトと琉球・沖縄の間には文化的断層がある。琉球・沖縄が「他者」でしかありえない以上、ヤマトと沖縄の文化的な距離を測る必要がある。両者の間に横たわる文化的断層の形成には、基層文化形成の段階でひとつの画期があ

つたとすれば、もうひとつの画期は琉球王国が形成される過程であつたと考えられる。それでは琉球王国はいかなる成立過程を経て誕生したのだろうか。十七世紀以降に琉球王国第二尚王統が編纂した正史は、少なくとも十五世紀以前に関しては「逆算の歴史」であり、史実そのものを語ることはない。

琉球王国創成期の史実を探るには、琉球王国第二尚王統編纂の祭式歌謡集である『おもろさうし』のおもろを用いることが有効である。『おもろさうし』では「おぼつ・かぐら」（天上他界）などの国王の支配力の源泉を他界から「せぢ」（不可視の靈力）を高級神女が降ろすことを謡うと同時に、割拠する男性支配者の人間関係を謡う。祭祀幻想と眼前の事実がおもろ世界の中で混在しているのである。

おもろは第二尚王統の神話、史実の断片を提示する。それらを繋ぎ合わせると、ひとつの像が結ばれる。薩摩と中国の狭間で翻弄された現実の琉球王国のアイデンティティを支えるのが、理想王である尚真王しょうしんおうの時代に回歸することであり、支配領域の充実を謡うことである。おもろ世界は、当時の人々にとっての「真実」を謡うのである（吉成・福、二〇〇六）。

おもろを検討すると、琉球王国の成立には倭寇が大きな役割を果たしていたこと、かれらのもたらした文化が、その後の琉球・沖縄の民間の文化を近現代にいたるまで規定してきたことが明らかになる（吉成・福、二〇〇六）。ここでは、倭寇にかかわるおもろを中心に検討し、あわせておもろが本場に「文学の古代」なのか、問題を提起する。

おもろは「男性的な世界」という一面を持つ。おもろ世界の男性支配者は船で積極的に外の世界に乗り出していき、交易、時には海賊行為によって富を手にする。あるいは、力づくで版図を広げる。そして、ヤマトの鎧や刀剣を好む。こうした男性像がきわめて倭寇的であることは言うまでもない。

第二尚氏にとつての真実を謡うおもろは倭寇的なものを残している。国家的枠組が形成され、史書が編纂されると、倭寇的なものは姿を消す。稲村賢敷は倭寇史跡が久米島に存在することを指摘する（稲村、一九五七）。一七二三年編



纂の『琉球国由来記』巻十九は久米島で群立する勢力の権力闘争の伝承を残すが、それはあくまでも過去のこととして語られる。

第二尚氏の神話、歴史が整序される以前、巧まずして真実を語る「おもろ」はやマト文化と沖縄文化の断層を示し、詩的言語の特異な可能性を示す。

### 倭寇おもろ

『おもろさうし』巻十は航海おもろの巻である。そこに、次のようなおもろが登場する。おもろ本文引用は岩波文庫版『おもろさうし上・下』（外間守善校注、二〇〇〇）による。

巻十・五四六

一勝り子<sup>まさこ</sup>が船<sup>ふな</sup>遣れ

ゑ 沖縄<sup>おきな</sup>按司<sup>あんし</sup>襲<sup>おそ</sup>いす ちよわれ

又浮<sup>う</sup>き揚<sup>あ</sup>がりぎや 船<sup>ふな</sup>遣れ

又無<sup>な</sup>気<sup>け</sup>手<sup>て</sup>て、思<sup>おも</sup>な

又あよてて、思<sup>おも</sup>な

又下<sup>しも</sup>の世<sup>よ</sup>の主<sup>ぬし</sup>の揃<sup>そろ</sup>い

又按<sup>あん</sup>司<sup>し</sup>又<sup>また</sup>の按<sup>あん</sup>司<sup>し</sup>の揃<sup>そろ</sup>い

又真<sup>ま</sup>誇<sup>ほこ</sup>りの女<sup>おな</sup>ぢやら

又精<sup>すあつ</sup>繼<sup>つ</sup>ぎの女<sup>おな</sup>ぢやら

勝り子が船を走らせます

国王様こそ栄えていらつしやる

浮き揚がり船を走らせます

無気力な漕ぎ手だとは思うな

危なげな漕ぎ手だとは思うな

下の世の主が揃い

按司のなかの按司が揃い

真誇りの女按司

精繼ぎの女按司

又親おやの基貢もとこまへ

又あさが基貢もとこまへ

又乞こうては得あらたな

又乞こうては佩はきよわな

又隠かくちへ得あたる

又盗のすで佩はちやる

又酒甕さけかめに入いたる

又神酒甕みきかめに入いたる

祖先に捧げる大事な貢物を

祖先に捧げる大事な貢物を

乞うては得ずに

乞うては身につけずに

隠して得たのだ

盗んで身に付けたのだ

酒甕に入れた

神酒甕に入れた

「勝り子」「浮き揚げり」は船頭を意味する。「沖繩按司襲い」は岩波文庫版では「国王」と解釈する。「あよて」など未詳語があり、意味を充分に理解できない部分も残る。しかし、最後の四行では明らかに「隠して得た」「盗んで身に付けた」、そして「酒甕に入れた」と謡うのである。酒は『おもしろさうし』では富の象徴であり、男たちに愛された飲料である。

盗って隠して酒甕に入れる、という行為を誰がするのかということが問題になるが、国王を取り巻く「下の世の主」「按司のなかの按司」たちと解釈できる。このおもしろは、まさに航海しながら盗みを働いていた倭寇の面影を色濃く宿しているとした解釈できない。みずからの行為を、おもしろは正直に告白していることになる。

『おもしろさうし』巻十は、第二尚氏の神話的イメージを残す。おもしろは始原世界への志向が強い歌謡であるが、巻十はその傾向が顕著である。その巻十に倭寇おもしろが存在する。このことは、巻十の編纂者が、倭寇的なものを隠匿する意志を持たなかったことを意味する。あわせてこの種のおもしろが、対語対句こそ整えているものの、文学として

の洗練、という意図を全く持っていないことも意味する。

このおもろの重複おもろは巻十三・八六六にあり、前半の五行だけの構成になっている。

一勝り子まさこ きよが船遣れふなや

沖繩おきなわ按司あんじ襲いしよ

ちよわれ

又浮き揚うがりぎや船遣れふなや

又無氣手なけちへて、思おもな

又たよてて、思おもな

勝り子が船を走らせませす

国王様こそ榮えていらつしやる

浮き揚がりうきあがりが船を走らせませす

無氣力な漕ぎ手だとは思ふな

危なげな漕ぎ手だとは思ふな

巻十三には、国王を「てだこ」と呼ぶ一連のおもろ群、また高級神女たちの航海守護のおもろ群などがある。巻十三の国王は公式の交易を行い、中国に船を出し、琉球王国に屹立する「ぐすく」の主として貢物を集める、と謡われる。そのような巻十三で「盗んだ」「隠して得た」という句は不要である。これらふたつの重複おもろは、琉球王国の表の顔と裏の顔を表現している。

「せにせに 金こがね 持ち寄せるぐすく」

国王と並び立つ「下の世の主」が「人の浦の貢」を搔き寄せる、と謡うおもろがある。「人の浦」に対し、「わが浦」という言葉があるように、「人の浦」とはおもろでは他人の支配する港湾集落を意味する。

巻八・四四六

一阿嘉あかのお祝付きあつきや

(おもろ歌人) 阿嘉のお祝付きは

人の浦うらに 在あつる

貢かま 寄せよ 搔かきつるぎ

又饒波ねはのお祝あつ付きや

又下しもの世の主ぬし

按司あちの又またの按司あちや

よその集落（他国、他島）にある

貢物を搔き寄せ、搔き寄せる

饒波のお祝付き（＝阿嘉のお祝付き）は

下の世の主の

按司の中の按司は

このおもろは、おもろを作り、謡う役割を持つおもろ歌人「阿嘉のお祝付き」が按司の中の按司である「下の世の主」の行為を謡っていると考えられる。「下の世の主」は、人の浦の貢物をかき集め続ける、というのがこのおもろの主旨である。なお巻八はおもろ歌人おもろ群だが、その中で第一に賛美されるのはこの「下の世の主」であり、尚真王ではない。この人物は先の倭寇おもろにも登場している。

「下の世の主」とは沖縄島南部の支配者であり、国王の身内同様の存在として「兄弟部大里すざべ ざんり（卷十三・七五〇）」とおもろで謡われることがある。この「下の世の主」こと大里按司とは南山王をさすと考えられる。

「人の浦の貢」を集める按司のおもろは、久米島おもろにもある。

卷十一・五九七

一福地儀間ふくじぎまの主しゅ

人の浦うらの貢かない

搔かき寄よせて

按司あち襲おそいに みおやせ

又かさす若わかてだに

福地儀間の主

よその集落（他国、他島）の貢租を

搔き寄せて

按司様に奉れ

かさす若按司に

人の浦の貢<sup>うらの かない</sup>

又真物若てだに<sup>まもんわか</sup>

よその集落の貢租を

真物若按司（＝かさす若按司）に

このおもろは久米島仲里村儀間の主は、よその村の貢租を掻き寄せて「かさす（真物）若てだ」に奉れと謡う。

「下の世の主」の「世の主」という称号を、第二尚氏の始祖、尚円王（在位一四七〇～七六）は島津家に出した文書で、「金丸世の主（金丸は尚円王の即位前の名）として用いている。また、万国津梁鐘銘には尚泰久王の神号「大世主<sup>よのぬし</sup>」をみる事ができる。この「世の主」という語は、『おもろさうし』では権力を持つ者、船で活発に交易をする者、支配地に不似合いなほどの富を蓄えている者、ほかの男性支配者と交流のある者、富を集め、武器を愛用する者、である。

そのような世の主達の中で最も権勢を揮ったのが「下の世の主」である。そして倭寇史跡を多数残し、沖縄島から中国への航路の要に位置する久米島の有力な按司が「かさす按司」である。このふたりが掻き寄せた「人の浦の貢」とは、まさに略奪財にはかならない、と考える。

『琉球国由来記』には、前掲の久米の名高い按司である「かさす若ちやら」は美貌であり、君真物神<sup>きみまもの</sup>が出現した時、男女の童には依らず、かの按司が取り持った、という記事を載せる。これはカミが「かさす按司」に依り憑いたことを示す。そのように、カミと関わる高級神女を「精高子<sup>せだかこ</sup>」（靈力にすぐれる）と称する例がある。「精高子」の用例のほとんどは神女を意味するが、男性が「精高子」の例もある。

「精高子」である久米の按司の用例は次のようになっている。

卷十一、五八二

一 具志川<sup>ぐしかわ</sup>の真玉内<sup>まだまうち</sup>は

具志川の真玉内（具志川ぐすくの美称）を

げらへて

よく げらへて

勝ちゆわる精高子せだかこ

又金福かなふくの真玉内まだまうちは

げらへて

又唐なうの船ふね せに 金こがね

持ち寄もせるぐすく

よく げらへて

又大和船やまとふね せに 金こがね

持ち寄もせるぐすく

造営して

見事に造営して

勝れ給う精高子

金福（具志川の美称）の真玉内（ぐすく）を

造営して

中国の船が、ぜに（銭）、こがね（財宝）を

持ち寄せるぐすく

見事に造営して

ヤマトの船が、ぜに、こがね（財宝）を

持ち寄せるぐすく

五八二ではまず、具志川ぐすくが見事に造営され、そこで「精高子せだかこ」の按司が勝れ給うと謡われる。『おもろさうし』では、国王や神女といった神格化された男女が「ぐすくを造営する」と謡われることがある。それは、世界の始原の時、神が聖域を造営したことを意味する。神格化された按司の造営した見事な具志川ぐすくとは、中国の船、あるいはヤマトの船が財宝を持ち寄せるぐすくなのである。

「精高子せだかこ」の具志川按司は、現世の富が集まる、金福かなふく（かねが豊かである）のぐすくの主である。「精高子せだかこ」は人間の霊能と同時に、男性の倭寇的な力を示している。あわせてこのおもろには祭祀における始原回帰の思想や男性の霊力とともに、きわめて即物的な現実が混在していることも指摘しておきたい。

筑紫ちやら

「筑紫ちやら」という剣がある。筑紫の支配者、という意味である。この名は「筑紫ちやら」を購入した場所が筑紫こと九州だったことを物語る。この剣は、第二尚王家の宝剣、てがねまる治金丸の別称でもある。

てがねまる治金丸の用例には、下の世の主に関わるものがある。

卷八・四二〇

一 おもろ音揚ねやがりや

いまや今と世は勝る

てがねまる治金丸

しま島かねて来居り

又宣せるむ音揚ねやがりや

しも又下の世の主や

おもろ音揚ねやがりは

今こそ世は勝れる

てがねまる治金丸は

島を囲い統べてきたのだ

せるむ音揚ねやがりは

下の世の主は

このおもろの「又下の世の主や」以降の省略されている詞句を補うと、「下の世の主や 今と 世は 勝る 治金丸 島 かねて 来居り」となる。大意は「下の世の主は今からこそ世は勝る、治金丸は島を囲い統べてきたのだ」である。王家の宝剣がここでは「下の世の主」の持ち物のように語られている。

てがねまる治金丸の用例は卷六・三三四と重複おもろの卷二十二・一五二五、そして四二〇の三例である。治金丸は、宮古の仲宗根豊見親が首里王府に献じた剣とされる。応永頃の信国作、とされる日本刀である。その刀がなぜ「筑紫ちやら」と称されるのであろうか。

卷六・三三四と一五二五の「治金丸」は国王の剣としての用例であるが、「筑紫ちやら」と「治金丸」は対句になつており、しかも「筑紫ちやら」が先行している。

卷六・三三四

一聞<sup>きこ</sup>ゑ君加那志<sup>きみがなし</sup>

鳴響<sup>とよ</sup>む君加那志<sup>きみがなし</sup>

此れど<sup>こ</sup>だにの 真<sup>ま</sup>てだやれ

又聞<sup>きこ</sup>へ按司襲<sup>あんじおそ</sup>いや

鳴響<sup>とよ</sup>む按司襲<sup>あちおそ</sup>いや

又筑紫<sup>つくし</sup>ちやら 佩<sup>は</sup>きよわちへ

治金丸<sup>てがねまる</sup> 差<sup>さ</sup>しよわちへ

又玉足駄<sup>たまあしぢや</sup> 踏<sup>ふ</sup>みよわちへ

名高い君加那志神女は

鳴り轟く君加那志神女は

これこそ真の太陽なるお方（国王）だ

名高い国王様は

鳴り轟く国王様は

筑紫ちやらを佩び給いて

治金丸を差し給いて

美しい足駄を履き給いて

一方、治金丸の別称の「筑紫ちやら」の用例（八例）は次のようになってゐる。

卷六・三三四、卷二十二・一五二五、卷十二・六七四Ⅱ第二尚氏の剣

卷十五・一〇八九（六七四の重複おもろ）Ⅱ浦襲の剣（英祖王統の剣）

卷十七・一二三七と重複おもろの卷十八・一二六七Ⅱ玉城按司の剣

卷二十・一三五六（二例）Ⅱ大里按司の剣

卷十二・六七四（卷十五・一〇八九の重複おもろ）の用例は次のようになってゐる。



一聞多おわもりや

按司の頂つと按司襲おそい

筑紫つくしちやら

玉きみづかの君使つかい

又鳴響とよむおわもりや

名高いおわもり神女は

按司の中で最高の按司様（国王）

筑紫ちやら

玉の君を使いを出して招く

鳴り轟くおわもり神女は

この王府おもろの重複おもろが浦襲おもろ群にある。それに似た事例として、米と黍の豊穰を謡う王府おもろ（六七二、六七三）の重複おもろが浦襲おもろ群に登場する（一〇八五、一〇八六）ことがあげられる。これは、第二尚王統の豊穰が浦襲の英祖王統の豊穰を原型としていることをおもろの配列で示す、『おもろさうし』の作為である（吉成・福、二〇〇六）。

第二尚氏の王は、浦襲の英祖王統の末裔である、とおもろで自称する。すなわち、「英祖にや末」とおもろで繰り返し謡うのである。そのような志向のもと、第二尚氏の宝剣が浦襲の宝剣と同様である、ということを示すためにもろを配列する思考を理解するのはたやすい。

卷十七・一二三七（卷十八・一二六七と重複）の用例は次のようになっている。

一おぎやか子が おもろ

筑紫つくしちやら おほいて

玉珈たまがはら玻羅

報国ほうこく寄よせぐすく

又おぎやか子が 宣せるむ

おぎやか子がおもろ（を謡う）

筑紫ちやらを佩びて

かはら玉（勾玉）

果報ある国を寄せるぐすくよ

おぎやか子がせるむ（を謡う）

ここでは筑紫ちやらは玉城にあらわれる。『おもしろさうし』には今帰仁と首里、そして玉城を結ぶ三角形が繰り返して謡われる。このことは、中山王位篡奪の際、金丸を中心とする今帰仁勢力と、玉城勢力が連携したことのであらわれである、と解釈できる（吉成・福、二〇〇六）。玉城には石鍋が出土し、藪薩（やぶさつ）という聖地がある。石鍋は長崎県西彼杵郡大瀬戸町で十二〜十四世紀に作られた滑石製の鍋で、その流通には海商・海賊集団、さらには倭寇が深く関わっていた。また、藪薩は壱岐、九州西海岸のヤブサ、ヤボサと繋がりのある聖地である。

玉城は沖縄島にすでに定着していた倭寇の拠点のひとつであり、今帰仁は新来の倭寇勢力の拠点であった。そのふたつが手を組んで中山王位を篡奪して樹立されたのが第二尚氏であると考える。玉城は第二尚王統にとっても大切な聖地であり、早魃の時、王はかつての玉城按司と同様に玉城ぐすくの聖域で雨乞いの神事を執り行う。第二尚王権の祖型の一部が玉城にあったからこそ、王家の宝剣と同名の剣が玉城おもしろ群にあらわれるのである。

また、このおもしろには「珈琲玉（勾玉）」が謡われている。第一尚氏、第二尚氏の紋章はともに左三つ巴紋であり、この紋は倭寇が八幡船に掲げた「八幡大菩薩」の神紋でもある。そして、三つ巴をおもしろでは三つの勾玉が回転した形、と謡う。玉城おもしろに「玉珈琲玉 報国寄せぐすく」とある詞句は「玉珈琲玉こと三つ巴紋の玉城は果報ある国を寄せるぐすく」と考えたい。

今帰仁ぐすくを「珈琲玉寄せ御ぐすく」と謡うおもしろ（八七〇）、おもしろ歌人阿嘉（あか）のお祝付きが謡う「世珈琲玉 寄せ御ぐすく（四三九）」、珈琲玉、手持ち玉を濯ぐ（二〇〇四）、珈琲玉、手持ちをヤマトへ買いに行く（五三八）、宇堅（おきん）しら殿の娘の持ち物であるらしい珈琲玉と真玉玉（二一六九）、島、国、石、金、珈琲玉、手持ちの命を奉れ、というおもしろ（六三五）がある。

今帰仁ぐすくを「珈琲玉寄せ御ぐすく」と称することは、「珈琲玉」が左三つ巴紋の象徴であることを示す。すな

わち、左三つ巴紋の旗を掲げる倭寇船が寄せられてくるぐすく、と今帰仁ぐすくを捉えることができる。

珈琲玉は本土で購入する玉であると同時に祭祀において濯がれる呪具であり、命を内包する霊物であり、左三つ巴紋を象徴したのではないか。

卷二十一・一三五六

一聞ゑ大里に

聞ゑ筑紫ちやら

取やり 栄ゆわれ

又鳴響む大里に

又鳴響む筑紫ちやら

名高い大里にて

名高い宝剣である筑紫ちやらを

取って 栄え給え

鳴り轟く大里にて

鳴り轟く宝剣である筑紫ちやらを

この短く特殊なおもろから、大里と「筑紫ちやら」の組み合わせを強調する意図を読み取ることができる。一で「名高い大里にて 名高い筑紫ちやらを」と謡っているながら、あとの二つの又で「鳴り轟く大里にて」と「鳴り轟く筑紫ちやらを」を対句として謡っているからである。

「きこゑ（へ）」は『おもろさうし』で「きこゑ大君（聞得大君）」はじめ多用される美称辞であるが、器物につく用例はこの「筑紫ちやら」と「くろかりや（夜光貝）」のみである。

卷十三・七九一

一久米のこいしのが

おとちよ思い 使よわ

聞へくろかりやよ

久米のこいしの神女が

おとちよ思いを使いにより給え

名高い夜光貝をば

取りよわやり 栄ふさよわ

又百浦も、うらこいしのが

取り給いて 栄え給え

百浦のこいしの神女が

「おとちよ思い」は人名であり、「くろかりや」は夜光貝のことである。航海守護で名高い久米のこいしの神女（百浦のこいしの神女）が「おとちよ思い」を使いに出し、「名高い夜光貝を取って 栄え給え」という意味である。

「名高い夜光貝を」「取り給いて 栄え給え」という詞句は、名高い大里で「名高い筑紫ちやらを」「取って 栄え給え」と同じ形式である。

久米島が「夜光貝（くろかりや）」の産地であり、集散地でもある、だからこそ「名高いくろかりやを取って 栄え給え」と謡われていることになる。このように考えると、同じ形式の展開をみせる「名高い筑紫ちやら」のおもしろは「名高い大里は、名高い筑紫ちやらの産地、あるいは集散地であるから、筑紫ちやらを取って栄え給え」という意味になると考えられる。ともに富や権力に深く結びつくもので、それを取った者が繁栄することである。大里按司こと下の世の主は筑紫ちやらのもたらす利権によって大いに繁栄したのではないか。

先に述べたように、下の世の主が治金丸の持ち主のようなおもしろがある。そして、治金丸は筑紫ちやらという別称を持つ。王家の宝剣となった治金丸は、あるいは第二尚氏の国王の身内同様の下の世の主の手を経て王家にもたらされたのかもしれない。

下の世の主が剣を愛好していたことは、おもしろから読み取れる。下の世の主は治金丸のほかにも刀とかかわったおもしろを巻八に残す。巻八・四〇七は「下の世の主は「かねもちの御腰みこし」を差して栄え給え」と謡われる。そして、次のおもしろ（四〇八）は下の世の主とは謡われないが「御星御腰みほしのみこし 又とむこが細工さいく 細工とまりや 又柄鞘つかもと 見れば 真玉照る御腰またまてのみこし」と星飾りの付いた太刀の輝きの美しさを称えている。この「御星御腰」は「かねもちの御腰」である

う。また巻八・四三三は「按司の中の按司である下の世の主のそはらの剣を見たる」と謡う。「そはらの剣」の「そはら」は未詳語であるが、下の世の主の所有する剣を意味している。

「かねもちの御腰」「そはらの剣」もまたヤマトから購入してきた剣であろう。かりに購入した場所が筑紫であったなら、これらも「筑紫ちやら」と呼ばれて差し支えない、と考える。「筑紫ちやら」の購入と集散を支配することによって繁栄した下の世の主こと大里按司は、複数の日本刀を持ち、それを顕示したのである。

筑紫玉御玉、筑紫襲い御玉

「筑紫玉御玉」「筑紫襲い御玉」の登場するおもろと、そのおもろにかかわるおもろは次のようになっている。

巻十二・六九二

一 筑紫玉御玉

島かねる 御玉

こくらの手持ち

持ちちへ みおやせ

又 筑紫襲い御玉

筑紫の御玉は

島を囲い統べる宝玉である

たくさんの手持ち玉を

持つて奉れ

筑紫の支配力を持つ御玉は

巻十二・六九三

一 糸数 おもろ

けさよりや 勝り

糸数（おもろ歌人）がおもろ（を謡う）

昔より勝れ

世玉よたまの留まりとどまりぐすく

又糸数いとかずが 宣せるむ

世玉の留まるぐすくであることよ

糸数がせるむ（を謡う）

六九二は「多くの手持ち玉を持つて奉れ」と謡い、六九三は「世玉の留まりぐすく」と謡う。多くの手持ち玉が集まり、ぐすくは「世玉の留まりぐすく」となったと考えられる。この二点は首里城おもろ群（六八九～六九一）と君手摩てずりの百果報事おもろ群（六九四、六九五）にはさまれて配列されており、六九三のぐすくとは首里城を意味すると考えられる。首里城の「島を囲い続ける筑紫由来の玉」とは何か。

それを知るには「島かねる」の意味を理解しなければならない。

「島かねる」の用例は全部で八例ある。六九二、「治金丸」のところで掲げた四二〇のほか、卷十三・九三一の「与論こいしのが真徳浦に通つて島かねて按司様に奉れ」、卷十五・一一〇二の「宜野湾ののろの伊差杜いさむらに降臨して島かねて按司様に奉れ」、卷十六・一一五〇の「伊計いけぐすく親のろは美しい橋を掛け、島かねて尚真王様に奉れ」、卷十九・一三〇二の「知念杜ぐすくでこの世は勝り、島かねて按司様に奉れ」などの用例がある。

これらの用例の中で注目すべきは卷十九・一三〇二の知念杜ぐすくの用例である。

知念杜には「国つほに（王の御座所）」があり（一三〇三）、あまみきよが初めて祈願した聖域であり（一三一）、果報ある国の寄る杜ぐすく（二三〇七）である。知念杜ぐすくには「上下の世襲よそい御殿おとの（国中を支配する御殿）」があり、黒金くろがねの子等こち（兵士達）が登場する（二三〇六）。そして倭寇の軍神である月しろ祈願がなされる（二三〇八）。

知念杜は「大国杜ちやくにもり」を対とし、「国つほに」の存在からわかるように王権に密着した聖域である。そこに兵士達があらわれることがあり、月しろ祈願がなされることもあった。これらのことは知念杜が軍神としての側面を持っていたことを示す。

一三〇二は「此世このよ 勝りまさよわちへ」と謡う。「世の主」でもある国王のこの世が勝るように、と知念杜で祈願されるのは当然である。そして、国王に「島をかねて」奉られる。この句は「島を囲い統べて」を意味する。その「囲い統べる」とは、島を船で取り囲んで支配するという意味であろう。

琉球列島にはかつて多くの権力者が群立していた時代があった。

例えばそれは、沖永良部島の倭寇、後蘭孫八ごらんまごはちであり、やはり倭寇の頭目であった八重山のオヤケアカハチであり、宮古の仲宗根豊見親である。このほかに名も知られぬ大勢の小権力者がひとつの島を、あるいは島をいくつかに分割し、覇権を競いあつていたと考えられる。小権力者の支配する島を攻略する方法は、島を多くの船で取り囲むことであらう。

六九二は筑紫の支配の玉は島を囲い統べる玉、と謡う。このことは、九州を本拠地としていた倭寇の旗印、三つの勾玉から成る左三つ巴紋を潜ませた「八幡大菩薩」の旗を押し立てた八幡船が島を囲い統べ、支配することを意味しているのではないか。

王家の紋章、左三つ巴紋を「世寄よせ三つ廻りまわりしよ 玉の王たまのわうやれな 果報かほうは 首里親国しよりおやぐに」と謡うのは卷七・三八二であり、三八三は国王を「てだが 思おもいよわる 真手持ちまても貴みた」と謡う。左三つ巴紋は玉の王であり、国王は「手持ち玉を持つお方」なのである。この一連のおもろ群から「手持ち」が手に持つ玉であると同時に左三つ巴紋を象徴している、ということができる。

「手持ち」が左三つ巴紋を象徴しているなら、六九二の「こくらの手持ち」は多くの玉であり、倭寇船としての意味もあると考える。そのような「こくらの手持ち」を掌握するのが「筑紫玉御玉」「筑紫襲い御玉」だったのではないか。その玉であり倭寇船でもあるものたちが留まるのが「世玉の留まりぐすく」こと首里城だったと考える。

前述のように、王家の宝剣「治金丸」の別称は「筑紫ちやら」である。「筑紫ちやら」は一振りの「治金丸」のみ

を示すのではなく、複数の「筑紫由来の剣」があつた可能性もある。ただ、王家の宝剣と活発に交易をしていた下の世の主の剣、そして玉城按司の剣がともに「筑紫ちやら」であり、下の世の主を賛美するおもろに前掲の「治金丸てがねまる島 かねて 来居りきよ（四二〇）」とあるのは、筑紫由来の剣や玉が島を支配するという思考があつたからだと考える。按司の中の按司である下の世の主が大和、筑紫へ船頭を遣わす、というおもろがある（四五七）。そのような航海によつて治金丸という名でも呼ばれる「筑紫ちやら」が購入されたのである。

筑紫由来の玉による島の支配によつて、首里城は「世玉の留まりぐすく」となる。世玉の世は「世の主」の世であり、現行の沖縄の祭りで乞われる世（よ、ゆ）である。それと同時に『おもろさうし』でしばしば倭寇的支配者を意味する「世の主」が交易や略奪によつて集めてきた富も世と称されたのではないか。

## 酒

おもろの男性支配者達は酒盛りをする。そのことがしばしばおもろに謡われる。

卷十五・一〇六九（卷十二・六七一との重複おもろ）

一伊祖いその戦いくさ思おもい

月の数かず 遊びあそ立ちた

十百年とよと 若わかてだ 栄はせ

又意地いぢ気き戦いくさ思おもい

又夏なつは しけち 盛もる

又冬ふゆは 御酒さけ 盛もる

伊祖の戦上手のお方（英祖王のこと）

月ごとに遊び立ち

永遠に若てだを繁栄させよ

勝れた戦上手のお方

夏はしけちを盛る

冬は御酒を盛る



卷十一・六四三

一下の掟しも おきて 音ね 取とて

月の数かず 夏の様やに

歎あまへる 清きよらや

又ものいにしや 音ね 取とて

又久米くめのくすく中城

月の数かず

又鳴響とよむ中城ぐすく

又冬ふゆ 夏なつむ 知しらず

又夏なつ 冬ふゆむ 知しらず

又冬ふゆわ 御酒さけ 盛もる

又夏なつは しけち 盛もる

又按司あんじからる かに ある

又てだからる かに ある

卷十五・一〇九二

一聞きこえ棚原たなはらに

夏なつ 冬ふゆむ 判わからず

下の方の掟（役人）が音頭を取って

月ごとに夏のように

喜び合う様の美しさよ

物を言うお方は音頭を取って

久米中城は

月ごとに

名高い中城は

冬、夏を知らず

夏、冬を知らず

冬は御酒を盛る

夏はしけちを盛る

按司からぞ、このようである

てだからぞ、このようである

名高い棚原に

夏も冬も判らず

飲<sup>あま</sup>へて しけちぢよ 盛り居<sup>も</sup>る

又<sup>また</sup>鳴<sup>な</sup>響<sup>な</sup>む 棚原<sup>なはら</sup>に

冬<sup>ふゆ</sup> 夏<sup>なつ</sup>も 判<sup>わか</sup>らず

喜んでしけちをこそ盛っている

名高い棚原に

冬も夏も判らず

一〇六九は戦上手の若き英祖王が月ごとに遊び、夏はしけち、冬は酒を盛っていたことを謡う。そして六四三は久米中城で月ごとに、冬、夏の区別無く、すなわち一年中冬は御酒、夏はしけちを盛っていたことを謡う。しかも「按司からる、てだからる」「かに ある」と係助詞の「る」と連体形の結び、係り結びによって久米中城按司の一年中の酒盛りのあり方が肯定的に強調される。そして一〇九二は名高い棚原で夏、冬も判らず、一年中しけちを盛っている情景が謡われる。

酒によって精神を別の次元に転位している状態を人工的に作り出すことができる。それは神懸かりの状況にも似る。おもしろにも祭祀において高級神女が酒に酔う、という例がある（三〇六）。また、久米島の祭祀おもしろにおいて多くの酒甕（百甕、八十甕）を祭祀の場に据える、という例もある（五六〇、五七六、五九三、ほか）。ただ、一〇六九や六四三が神事としての神遊びで酒を盛る、とは考えられない。これらの用例は武力長けた酒好きな男性たちが酒盛りをしている情景にはかならない。

冬、という季節感の乏しい沖繩のおもしろで冬が謡われるのは以上の三点と重複おもしろのみである。一年中酒盛りをする、という表現として「冬」がおもしろ語彙として存在することの意味は何だろうか。

下の世の主こと大里按司の支配する大里は「神酒国、酒国」である（一三六三）。そして名高い今帰仁は「大神酒の満ち上<sup>あ</sup>がるぐすく（一一九八）」であり、「御神酒<sup>みかみ</sup>の数（たくさん）の神酒」を癖<sup>くせ</sup>でている（酒を造る、一一九九）のである。今帰仁を「国<sup>くに</sup>な頂<sup>つち</sup>（国の最上のところ）」とおもしろ歌人の阿嘉犬<sup>あかいん</sup>お祝<sup>まつ</sup>付きは謡うが、そのおもしろは名高い

今婦仁に上つてしけち、御酒を出せ、酒盛りをしていこうよ、と続く（一〇二五）。

また、勝連の兄者に真糸緘の鎧を土産にしよう、とする北谷の世の主は「大神酒を造り、酒倉を立てる」のである（一一〇五）。また察度王の弟であり、明に使いした泰期こと宇座の泰期思いにはしけち、御酒が捧げられるが、その酒は「鏡色の輝で水」である（一一一九）。透明度と輝きが強調される「鏡色」と表現されるのは『おもろさうし』の中ではこの一例のみであり、この酒が蒸留酒であることを意味すると考えたい（福、二〇〇六、三二）。

また、上江洲の名高い国は「御酒、真神酒や 泉と し居る（酒が泉のように湧き出す、一一七二）」であり、名高い具志頭は多くの倉の立つ国の根（中心）であり、「神酒 香し 親国（二〇四八）」である。そして、巻十九と巻二十に十三点の重複おもろ群を記載され、おもろ編纂者に重要視されていると考えられる坂名城の門口は「神酒寄せが門口 酒寄せが門口（二〇五〇）」と称される。また、与論島古里の大みつのみで思いは初旅、新旅に御酒盛り所、御神酒盛り所に輩、乳弟者を誘うと謡う（九五七）。

他の酒の例は措くが、このようにおもろの酒は祭祀の際の飲料、というよりも男性的な世界を彩る酒である場合が多い。倭寇的な世界において酒が重要視されるのは当然である。

## 鬼

石原道博によれば、明の将兵たちは倭寇に対して畏怖の念を持っていたが、それは倭寇が「鬼神」を信じ、祈祷を捧げ、卜占を信じるということも影響があったという（石原道博一九六四、二六）。「鬼」は『おもろさうし』にあらわれ、異常で魔術的な靈力を持った存在を意味する。

琉球王国第二尚王統の最後の王、尚泰王は琉球処分に伴う清との冊封朝貢関係の廃絶に悩み、「このうえは神力に

憑（よ）らねばならぬ」と言つて鬼神を崇拜した。このことは喜舎場朝賢の『東汀隨筆』（二九二七）に記される。伊波普猷は喜舎場翁に直接きいた話として、「当時王は非常に神事に熱中して居られ、城中の首里森という所で国中の鬼神を祭られていたとのであります」と伝える（大橋、一九九八、七六）。

『おもろさうし』には第二尚氏の始祖金丸を「内間の鬼さん」と謡う例がある。

卷十七・一二〇二

一内間掟

鬼さんこ

ゑけ 誇ら

又辺り山

垣内山

又桑木 植ゑて

なです 植ゑて

又鼓 造て

鳴り呼ぶ 造て

内間掟様よ

鬼さんこ様よ

ゑけ 誇りましよう

辺り山に

垣内山に

桑の木を植ゑて

なです（桑木）を植ゑて

鼓を造つて

鳴り呼ぶ（鼓）を造つて

このおもろは内間の地頭職にあった、という金丸の王位以前の姿を謡っている。屋敷内外の土地である辺り山、垣内山に鼓の材料の桑木を植ゑ、金丸は鼓を造る。鼓は聴覚優位で音響を重要視する『おもろさうし』の世界の最高位の楽器である。鼓は「打ち鳴らすことによつて靈力を高める」祭器でもある。

そして、『おもろさうし』や正史の記述には三機能体系が認められる。三機能体系とはインド・ヨーロッパ語族の

神話を分析することによって導き出された理念で、第一機能である支配機能を頂点に、武力の第二機能、生産・豊饒の第三機能が階層化され、相互補完しあうことによって完全な世界が形成される、とする物の見方である。

琉球の三機能のものの見方において、第一機能を示すのは鼓である。おもろ世界では鼓は世を支配する拍子である「世掛け拍子」「世添う拍子」「世寄せ拍子」ほかを打ち出す（福、二〇〇五、三〇〇）。内間掟であった時代に金丸が桑木を植え、鼓を造った、と謡うことは金丸が鼓に象徴される王国支配の原型を創ったことを意味する。

その時代の金丸は「鬼さんこ」である。「鬼さんこ」が支配の原型を創った国の最後の王が王国の危機に「鬼神」に祈る、ということは相応に筋が通っている。

また鬼に関わるおもろには、次のような例がある。

卷十四・一〇四四

一御嶽 おたけ みやてらに

誰が たれ 弦 つる 鳴らす

命鬼の殿 いのちのわに やちよ

又東のひが小坂に

又せぢのたげ田原

舞まわさたな 射まり落おとちへ

命鬼の殿 いのちのわに やちよ

御嶽、みやてらに

誰が弦を鳴らす

命鬼の殿は永遠に（ましませ）

東の小坂に

せぢの田原に舞う鳥を

舞わせないで射落とせ

命鬼の殿は永遠に（ましませ）

このおもろは御嶽であり宮寺である場所です。弓を鳴らす、すなわち聖域で鳴弦をする人物を謡っている。鳴弦は日本本土では『源氏物語』の時代から魔除けの意味を持っている。

おもろはこの人物を「命鬼の殿はいつまでもあれ」と祝福しているほか、田を舞う鳥、すなわち水稻耕作の稲を狙う鳥を「射落としてしまえ」と謡う。鳴弦、殿という呼称、水稻、舞う鳥を射落とすという弓術の技量はこのおもろの主人公がヤマトの公的儀礼を知った、弓術の技量もある人だったことを思わせる。

卷十七・一一八五

一源河成り思ひや

源河成り思ひ様は

せぢ玉ぐすく

せぢ玉ぐすく（靈力あるぐすく）で

大和の鬼おに かに ある

大和の鬼もかくあるかのようにだ

又意地いぢ気成り思ひや

勝れて活気ある成り思ひ様は

卷十七・一一八六

一源河成り思ひぎんかなが

源河成り思ひ様が

今帰仁いまきぜん 上のほて

今帰仁に上つて

徳満とくみつは げらへて

徳満つ（倉名）を造営して

徳満とくみつは

徳満つは

御倉くろぐらの 鳴響とよみ

御倉の（中でも）鳴り轟き

又意地いぢ気成り思ひなが

勝れて活気ある成り思ひ様が

卷十七・一一八七

一聞へ池城いけぐすく

名高い池城

見らんすがみらんすが 亡びほろび

見ない者が亡び

聞ゑ鬼きこおに

名高い鬼を

見ちやすがみちやすが 勝りまさり

見た者が勝れる

又鳴響む池城またとよいけぐすく

鳴り轟く池城

この三点は今帰仁周辺における「鬼おもろ群」とでも言うべき様相を呈している。まず、源河成り思ひなる人物のせち玉ぐすくは、大和の鬼もかくある、と謡う。これは、源河成り思ひが大和からやって来た鬼のようだ、ということである。この鬼は、倭寇を示す、と考える。

源河の対語の意地氣（いちへき、いちゑき、いちき）は全部で三四例ある。「意地氣」が美称するものはほとんどが男性按司や役人であり、僅かに神、地名につくことがある。「意地氣」には、英祖王の用例、察度王とみられる例、察度王の弟で明に使用した泰期の用例、佐敷按司で第一尚王統の王の用例がみられる。また、第二尚王統が祭祀のある部分を確実に継承している玉城按司も「意地氣」と美称される。このことは「意地氣」が第二尚王統にとって過去の王権の中心人物を美称することを意味の中心として示す。

源河成り思ひが具体的にいかなる人物であったかわからないが、今帰仁周辺の有力者であった、と推定される。

一一八六では同名の人物が今帰仁に上り、「徳満つ」という名の倉を造営して、その倉が鳴り轟いたと謡う。「せち玉ぐすく」にいる源河成り思ひは建造物を造営する能力に長けていたのだろう。ちなみに「せち玉ぐすく」の用例は『おもろやうし』の中ではこれひとつである。

一一八七では、池城で見なかった者が亡び、名高い鬼を見た者は勝れた、と謡う。このおもろの意味も通らないが、

鬼が「聞え鬼」であること、鬼と視線とのかかわりが謡われていることがわかる。一三九六の久米の「鬼の君」の用例にも、鬼の君が目付けをする、見る、といった視線に係る謡われ方がされている。「鬼の祭祀」とでもいうべきものがあり、視線とかかわる所作があつたのかもしれないが、はっきりわからない。

以上が今帰仁周辺の鬼の用例である。倭寇が拠点としていた、と考えられる今帰仁周辺の源河、池城に「鬼」が出没することは偶然ではない。今帰仁と友好関係を結び、時には小競り合いもする倭寇の群像の一端が、これらの用例に留められている、と考える。

男性が鬼、と称される他の例には次のようなものがある。

# 卷十一・六一四

一世玉子ぎや おもろ

鬼より 勝利

せぢ 添わて

百ぢやら 負け

又世玉子ぎや 宣るむ

又久米の按司襲いや

又鳴響む按司襲いや

世玉子がおもろ（を謡う）

鬼より勝利

せぢ（靈力）添って

多くの按司たちを負け

世玉子がせるむ（を謡う）

久米の按司様は

名高い按司様は

おもろは「世玉子」という名のおもろ歌唱者が久米の名高い按司を「鬼より勝利」「せぢが添って多くの按司達を負かせ」と謡っている。鬼より強力な久米の支配者とは、倭寇の鬼神より強い、多くの按司と戦をしたら、相手を負かす、と誇っているように読める。



このおもろに続き、六一五は「一世玉子ぎや おもろ 今ど 世わ 勝る 世玉の留まるぐすく 又世玉仁屋が宣るむ（後略）」、六一六は「一世玉子ぎや おもろ 百按司より 勝りよわ 末 長く 玉世 揃いわちへ（後略）」となっている。鬼より強力な久米の按司のもと世が勝れ、「世玉の留まるぐすく」となり、「多くの按司より勝れ、末永く玉世を揃える」のである。

久米の按司のもとで勝る世とは、富、権力であり、倭寇にかかわる三つ巴紋の玉でもあったのではない。三つの玉から成る「世玉」が留まるぐすく、とは倭寇の八幡船が留まるぐすく、末長く「玉世」を揃えるとは倭寇たちを掌握し、富や権力を集めることを意味しているのではない。

鬼はまた、靈力を誇る神女に冠せられることがある。久米島の名高い神女、君南風は「鬼の君南風」と称される（五八三、五八四、五八五、五八六、六四一、一四五一、一四七三）。君南風は久米具志川按司に対応する神女であり、具志川按司は前掲の「せに こがね 持ち寄せるぐすく」の主で、倭寇支配者でもある。

五八四では「鬼の君南風」の対語は「襲い君南風」である。「おそい」は按司の接尾敬称辞となる語であり、「支配」することを意味する。かつての英祖王統の本拠地、浦襲（現在の浦添）が浦（港湾集落）を支配する地、という名を持つていたことから、「襲い」の意味が了解されよう。この対語の関係から、「襲い」の力は鬼が持つていた、とみなされていたことがわかる。

ちなみに「襲い」が接頭美称辞として用いられるのは、「襲い君南風」の七例（五八四、五八五、五八六、六四一、一四五一、一四七二、一四七三）と「襲いにせ按司襲い」（巻一・六、国王を意味する）のみである。「鬼の君南風」と「襲い君南風」は対応しているのである。そのほかに安谷屋の神女「鬼の君」、久米の神女「鬼の君」、航海守護の神女「鬼殿」の用例もある。

また、王府の高級神女君加那志が祭祀を行う場が「鬼ぐすく」と称されることがある。

卷六・三二七

一 君加那志きみがなし

君きみの按司あぢす 知りしゆわめ

上下かみ 襲おそて

適かなわしよわれ

又あ吾あなが成なさい子こ

てだ成なさい子こす 知りしよわめ

又よきなわ沖繩なつ 夏なつ 立てたば

命いのちかみつか神かみ使つかい

又おに鬼おにぐすく 夏なつ 立てたば

命いのちかみつか神かみ使つかい

又わ我わが親おやぐに国くに 夏なつ 立てたば

命いのちかみつか神かみ使つかい

君加那志神女

君の最高の方こそ知り給うであらう

国中を支配して

ふさわしくなり給え

わが父なるお方

太陽にして父なるお方こそ知り給うであらう

沖縄に夏が立てば

命神を使いを出して招き

鬼ぐすくに夏が立てば

命神を使いを出して招き

わが親国に夏が立てば

命神を使いを出して招き

卷六・三三二

一 聞きこゑ君加那志きみがなし

降おれて 鳴とよ響よま

又かぐろ神座けわの競けい

撓しない やちよこ

名高い君加那志神女

降臨して鳴り轟け

かぐらでの競い合いに

村頭の妻女たちが和合して

又鳴響む君加那志とよ きみがなし

降れて鳴響まお 鳴とよ

又おぼつの競いけい

撓い やちよこしな

又聞ゑ鬼ぐすくきこ おに

又赤金添へ鐔あかがね そつば

又鳴響む鬼ぐすくとよ おに

又白金玉纏やしろがね たまき

又うち置け うち置け うち置けお お お

又意地氣や 玉纏やいぢへき たまき

又玉腰け うち置けたまこし お

又すもりやは けつか

卷九・四九五

一聞ゑ鬼ぐすくきこ おに

君加那志 手摩てきみがなし てづ

上下かみしも

押し合わちへ ちよわれお あ

又鳴響む鬼ぐすくとよ おに

鳴り轟く君加那志神女

降臨して鳴り轟け

おぼつの競い合いに

村頭の妻女たちが和合して

名高い鬼ぐすく

銅の鐔のついた立派な刀

鳴り轟く鬼ぐすく

銀の玉纏の付いた立派な刀

うち置け、うち置け、うち置け

勝れて立派な玉で巻いた柄

玉で飾った腰のものを、うち置け

(未詳語)

名高い鬼ぐすく

君加那志は手を摩って祈願して

国中を

押し合わしてましませ

鳴り轟く鬼ぐすく

君加那志は王府の高級神女であり、巻六には君加那志おもろ群（二九八～三三四、三七点）が存在する。三二六では君加那志の祭祀によって国王が世界を支配する島討ちの力を獲得する。三二六をふまえ、三二七では国中を国王が支配することになる。

三二七は「沖繩」「鬼ぐすく」「わが親国」で、夏、命神祭祀が行われることを謡う。親国の用例は全二九例で、首里Ⅱ一六例、具志川Ⅱ五例、浦襲Ⅱ二例、以下、江洲、具志頭、島尻、佐敷、兼城、沖繩（三二七）を意味する。三二七の用例も首里、と取れる。

「ゑのちかみ」が具体的にどのような存在なのかかわからないが、君加那志との特別のつながりがおもろから見て取れる。すなわち「ゑのちかみ」の用例は全部で六例あり、五例までが君加那志と関連している。三二七の三例と三三〇（下の世の主こと南山王の本拠地大里で、夏、命神祭祀をする）、三三〇の重複おもろの巻二十二・一五一二が「君加那志」関連の事例である。

そしてもう一例は巻二・七六「こゑくこて越来小照る曲に いのちともおそ命伴襲いや いのちかみどの命神殿に つか使い や又遣り笠の親のろ」である。越来の地は金丸の恩人とされる第一尚氏しやうたいきやうの尚泰久王の本拠地であり、倭寇の面影を強く宿す男性支配者「越来世の主」が支配する地である。越来のみに出現する命神殿は倭寇的要素ではないか。君加那志が中心になって祭祀を行う「命神」も、ヤマト的な神で、倭寇の鬼神と関係があったのかもしれない。

また前掲の、御嶽で弓弦を鳴らし、田の上を舞う鳥を射落とす者を「いのちおに命鬼の殿」と謡う（一〇四四）用例がある。この田を所有する弓の名手は、ヤマト出身の武士ではないか。「命」「鬼」をヤマト的、倭寇的要素と考える。

三三二で君加那志は「かぐらのけわい、おぼつのけわい（具体的な内容は不明、岩波文庫本脚注では神遊びでの舞を競うこと、とする）」を村頭の妻女たち（やちよこ、祭祀の補佐役）と行った。その場が「鬼ぐすく」である。そ

ここでは「赤金添へ鍔」<sup>あかがねぞ つば</sup>「白金玉纏」<sup>しろがねたまき</sup>、すなわち銅の鍔のついた立派な刀、銀の玉で巻いた柄の立派な刀が「意地気」<sup>いぢへき</sup>（力強い男性支配者の美称）と称される。このような鬼ぐすくで刀を用いる祭祀が、美しい神舞の競い合いとは考えられない。

四九五は「聞え鬼ぐすく」から始まっている。そこで君加那志は手を摩つて祈願し、国中を押し合わせてましませ、というのである。上下は尚真王に関連するおもろを集めた巻五に多出する言葉であり、君加那志も国王に対応する神女として、国中の統一のために靈能を発揮したのであろう。

双性のシャーマンであり、武力行使（島討ち）と関わり、下の世の主の祭祀も担当する君加那志は倭寇的な神と結びついていた、と思われる。君加那志が中心となる祭祀空間が「鬼ぐすく」であることも、それを示しているのではないか。

また、おもろ歌人おもろの用例にも「鬼ぐすく」が二例ある。

#### 巻八・四二四

一 おもろ音揚がりや<sup>ねや</sup>

鬼ぐすく<sup>けぐすく</sup> 気合わせ<sup>けあわせ</sup>

又宣るむ音揚がりや<sup>せ</sup>

おもろ音揚がりは

鬼ぐすくで気を合わせ

せるむ音揚がりは

#### 巻八・四二七

一 おもろ音揚がりや<sup>ねや</sup>

上て<sup>のぼ</sup> 見ちやる<sup>みちやる</sup> 勝り<sup>まさ</sup>

又宣るむ音揚がりや<sup>せ</sup>

おもろ音揚がりは

上つて見たところ勝れている

せるむ音揚がりは

又聞きこゑ鬼おにぐすく

名高い鬼おにぐすく

四二〇、四二一、四二三、四二五、四二六、四二九は「下の世の主」関連のおもろの用例である。四二四、四二七とも明記されていないが、「下の世の主」に関連するおもろと考えられる。

四二四の「気合わせ」とは二八一の尚真王を賛美するおもろで「あまみきよ、しねりきよが島、国を造り、尚真王が島、国の気を合わす」とある表現と同義であろう。また、四二七では「鬼ぐすくに上る」とあるので、鬼ぐすくがぐすくの高所、拝所であろうと思われる。用例が短いおもろであり、周辺のおもろの配列と関連性を持たせにくいのが、鬼ぐすくでもおもろ歌人「おもろ音揚げり」が祭祀を行ったであろう、という推定はできる。

「鬼ぐすく」祭祀は下の世の主のぐすく、首里城に存在し、おもろ音揚げりと君加那志がそこで祭祀を行った。具體的な祭祀のあり方は不明ながら、倭寇的な神に祈ったと考える。

また、航海の安全を守り、支配権の象徴でもある鷺うさぎが「鬼鷺」と称されることがある。それは次の用例である。

卷十三・九六七

一奥渡おくとま 舞うまう 鬼鷺おにわし

沖の海を舞う鬼鷺は

つ、が上うま 使つかい

つつの上の神の使つかい

吾あな 守まもて

私を守つて

此渡このと 渡わたしよわれ

この海を渡し給え

又渡中となか 舞まう 鬼鷺おにわし

沖の海を舞う鬼鷺は

せひが上うま 使つかい

せひの上の神の使つかい

卷十九・一二九一

一 佐敷門口に

鬼鷲の

羽撃ちする 見物

又西の門口に

佐敷の門口で

鬼鷲の

羽ばたきをする見事さよ

西の門口に

九六七で鬼鷲はつつ（船の帆柱を受ける太い柱）、せひ（帆柱の先端に取り付ける滑車）の上を舞う神の使いであり、吾を守護する。「吾 守て 此渡 渡しやわれ」は航海おもしろの常套句であり、卷十三の航海おもしろに多くの用例をみることができる。

鷲の羽は「風直り」という名称で神女の頭の飾りとなることがある。『沖繩古語大辞典』の「風直り」の項には「鷲は霊鳥で、その羽には、風を支配する力があると信じられてきた」とある。鷲の名は船名（鷲が舞やい富Ⅱ七八七、真鷲Ⅱ一〇五一）になり、鷲は此渡・大渡（一四四五）、奥渡・渡中（九六七）を舞う。また、空の高みである中辺・雲辺（二六九）、中辺頂・雲居頂（二三六二）を舞う。その鷲は「ものをしる」と謡われることがある。不可知の世界を知る、ということの意味する（二六九、一四四五）。そのような鷲が航海守護を担うのである。

鷲は『おもしろさうし』において、支配権の象徴でもある。そして、「世掛け鷲（世界を支配する鷲）」「百鳥引き寄せる鷲」「綾鷲」を神女が捕らえる、というおもしろがある。世界の支配権を象徴する鷲を神女が捕らえ（一三六二）、男性に取らせる（一三三三）のである。それによって男性は支配権を獲得する、という呪的思想が『おもしろさうし』には存在する。

一二九一ではそのような霊鳥鷲が、地上の門口で羽ばたく。鷲が登場するのは佐敷、浦襲（一〇七八）、玻名城

(一三三三・一三八六)、大里(一三六二)、安谷屋(一〇四六)、山城(二三四〇)、首里王城(三五九・五〇二)である。王城のほか、第一尚氏の本拠地佐敷、南山王の本拠地大里、英祖王統の本拠地浦襲、多数のおもろで賛美される山城と玻名城、好意的に謡われる安谷屋に鷲が登場する。いずれも、鷲に象徴される権力を掌握した男性支配者のいた地である。

しかし、鬼鷲が地上に存在する、と謡われるのは佐敷のみである。前述のように鷲は「ものをする」と謡われることがある。物知りとはシャーマンを意味する。物知りである強力な霊力を誇る鷲を捕らえた第一尚氏の王は、シャーマン王でもあった、と考える。王がシャーマン王であるからこそ、割拠した按司の中で、尚巴志が三山鼎立時代に終わりを告げさせたとされるのである。

なお鬼鷲のおもろの次の一二九二では佐敷苗代での月しろ祭祀が謡われる。

一苗代なかしろの庭みやに

月代しろうは 手摩てづて

月代つきしろす

成なさい子思きよもい

守まもりよわめ

又今日けよの良よかる日ひに

苗代の神庭にて

月しろ神に手を摩もって祈願して

月しろこそ

父なるお方を

守護し給え

今日の良き日に

月しろとは第一尚氏の軍神であり、八幡信仰にかかわる月神である。満月の夜に八幡神を観想する、という信仰が八幡船の倭寇によって沖縄にもたらされた、と考えられる。一二九一、一二九二と鬼鷲、倭寇の月神が佐敷おもろ群に配列されていることは興味深い。



なお、安谷屋おもしろの「世掛け鷲」は安谷屋の杜で、鬼の君によって捕えられる。鬼、と称される強い霊能を誇る神女が鷲を捕らえるのである。

### おわりに

池宮正治は祭式歌謡であるおもしろを使つて古琉球をみる方法の大きな問題点として、「この時代をマジカルな社会であるかのように印象づけたこと」をあげる（池宮、一九九一、一九四）。王を頂点に、対なる女性として聞得大君を置き、女性が王を霊的に守護する、そして按司や地方権力者と神女の関係が重層していたことを池宮は指摘する一方、「この時代がこうした世界ばかりではなかったこと」、「中世の同時代の時空を共有していたこと」を述べる。そして「多くの琉球僧が京都、足利学校、金沢文庫、鎌倉円覚寺、あるいは遠く瑞巖寺まで足を延ばし、一〇年から二〇年かけて修行を摘んでいた僧たちがいる。いわば中世的なインテリジェンスをも共有していたはずである。」と述べる。従来の『おもしろさうし』研究は、このような視点を著しく欠いてきた。おもしろが現代のわれわれから見て意味不明のものであつても、記載のあり方は端正で一・又記号が用いられている。池宮は「採録の役人は音楽的な感覚がなくは叶わない」こと、そして「表記も近世の琉歌集とは比較にならないほど正確」であり、「個人を越えた正書法」の存在を想定する（池宮、一九九一、一九一）。

中世と同時代のおもしろ集が近世に正書法を以つて採録されたという事実を忘れてはならない。

『おもしろさうし』の編纂意図は複雑に絡み合っている。王族の高級神女おもしろの巻では天女のように美しい神女たちの祭祀のありさまが謡われる。一方、おもしろ歌人のおもしろを集めた巻八に神女は全く登場せず、おもしろ歌人と各地に割拠する男性支配者、そして国王、といった男たちの群像が示される。また、地方おもしろの世界では第二尚王統以

前の地方的な王たちが賛美される。

巻五では尚真王が神格化され賛美されているのに、巻八で第一に賛美されるのは下の世の主であり尚真王ではない。巻五は理想王だった尚真王は神である、という後世の人々の「真実」を謡う。信仰の次元の「真実」と言ってよい。そして、巻八は尚真王の近くに王に取って代わろうとする大権力者がいたことを示す。それはおそらく史実として伝承されてきた「真実」である。このように、おもしろ世界には多様な「真実」が混在しているのである。

いずれにせよ、『おもしろさうし』は従来の日本文学の枠組みに納まることは決してない。文学としておもしろを考える、という意識を捨てるべきであろう。

おもしろ世界の男性的な側面に注目すると、『おもしろさうし』は倭寇的な価値観をそのまま提示していることがわかる。「銭、こがね」を良しとし、酒を好み、航海しながら富を蓄え、沖縄島に割拠する勢力同士が時に「兄者」「弟者」と呼び合って手を結び、時に反目しあい、やがて王を名乗る者に権力が収斂していく道筋を、おもしろと周辺史料を活用することによって描くことができる。倭寇的なものを活写したおもしろは、自らの歴史を書き残すことのなかった人々の真実を伝える。

おもしろの語源は「思ふ」である、「神言を言い出す」、「神に宣<sup>のたま</sup>り奉る」という意味である、という定説は国語辞典にも記載され、広く人口に膾炙している。その定説は、折口信夫が日本神話の思慮と叡智の神、オモヒカネの発する呪言や天子の言葉について述べた事柄に依拠している。しかしその定説は、沖縄には日本の古代が残り、歴史的発展段階が遅いとする誤った認識から出発している。そして、南島に広く分布する神歌群の中におもしろを無理に位置づけ、おもしろの原義を「神の言葉」と定義している。近世から現代に採録された神歌群は口承で伝えられたもので、整序された形で文字化されたおもしろとは文学的出发点が異なっており、安易な比較対照を行うべきではない。

『おもしろさうし』には神や神女など信仰とかわる世界と倭寇的な世界が共存している。「人の浦の貢を掻き寄せ

る」や「一年中賑やかに酒を飲む」あるいは「盗った、隠した、酒甕に入れた」ことを謡うおもろを、神の言葉、として捉えることはできない。それらは倭寇の「自慢」がおもろになったものに過ぎない。

琉球・沖縄文化に古代日本の残像を見ることに熱心だったかつての定説を、今後、徹底的に見直すべきである。なぜ倭寇おもろが『おもろさうし』に残ったのだろうか。それは、散文でも漢文でもなくおもろだったからこそ可能だったと考える。史書でどれほど過去の歴史を潤色しようとも、おもろに無理に作為をしのばせることはできなかったのではないか。

おもろによって琉球王国の過去を騙ることはできなかった。それはリズムに乗り、声に出して謡われた謡いものが原型のおもろ生来の、呪性、巫性、聖性と俗性の綯い交ぜになった、定義しようのない歌謡としての性格に由来する。

琉球王国が誕生するにいたる史実の断片はおもろの中にある。『おもろさうし』には倭寇おもろと呼ぶべきおもろがあること、おもろの更なる分析を通し、琉球弧のダイナミックな歴史の一部を復元できるという展望を示し、論を閉じたい。

#### 参考文献

- 池宮正治「王と王権の周辺」『新琉球史』琉球新報社、一九九一年。  
 石原道博『倭寇』、吉川弘文館、一九六四年。  
 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』、一九五七年。  
 大橋英寿『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』、弘文堂、一九九八年。  
 『沖縄古語大辞典』編纂委員会、『沖縄古語大辞典』角川書店、一九九五年。

仲原善忠、『仲原善忠全集第二卷』沖縄タイムス社、一九七七年。

福寛美、『「おもしろさうし」の三機能体系』『比較神話学の鳥瞰図』吉田敦彦監修、大和書房、二〇〇五年。

福寛美、『月の雫、花の露、若水試論』『學習院大學國語國文學會誌第四十九号』、學習院大學國語國文學會編集発行、二〇〇六年。

外間守善校注、『おもしろさうし 上・下』岩波書店、二〇〇〇年。

外間守善・西郷信綱校注、『日本思想大系 おもしろさうし』岩波書店、一九七二年。

外間守善・仲原善忠著、『おもしろさうし 辞典・総索引 第二版』角川書店、一九七八年。

外間守善・波照間永吉『琉球国由来記』角川書店、一九九七年。

吉成直樹、『マレピトの文化史』第一書房、一九九五年。

吉成直樹、『琉球民俗の底流 古歌謡は何を語るか』古今書院、二〇〇三年。

吉成直樹・福寛美、『琉球王国と倭寇 おもろの語る歴史』森話社、二〇〇六年。

## Wakō ('Japanese pirate') songs in *Omoro sōshi*: the cultural distance between Yamato and Okinawa

FUKU Hiromi  
YOSHINARI Naoki

The earliest written source material of the Ryūkyū kingdom, the collection of songs *Omoro sōshi* of 1623, includes a song text that cannot be interpreted in any other way than as describing the king and his noble companions committing thievery while sailing around the seas. Other *omoro* songs describe powerful male local rulers raking up tribute from harbor villages ruled by others. These are clearly songs of plunder and looting.

There are other songs in which a sword named Tsukushi Chiyara ('The Powerful One of Tsukushi') appears. Tsukushi was a name for Kyushu, where the sword was purchased, and the name is known as another designation for the treasure-sword Teganemaru, owned by the rulers of the second Shō dynasty. Another song can be interpreted as saying that the great ruler of the southern Okinawan area (*shimo no yo no nushi*) prospered because of the rights he gained by possessing the sword Tsukushi Chiyara.

Among songs associated with ruling dynasty, there are songs about gems, 'Gems with Power of Tsukushi,' which describe the gems surrounding the islands they rule. It seems reasonable to identify these gems with the three comma-shaped beads of the *hidari-mitsudomoe* used as the crest of the ruling dynasty, the sacred crest of Hachiman Daibosatsu, and the crest on the banner flown by Wakō Hachimansen pirate ships. This interpretation is supported by another song which describes the *mitsudome* pattern as three *magatama* (comma-shaped beads) in a circle. In short, it was thought that swords and beads deriving from Tsukushi (Kyushu) validated the rule of the Ryūkyū kingdom.

Another *omoro* song sings of drinking alcohol in winter and summer,

that is, all year round. Men's liking for alcohol is a common theme in these songs, which imply that powerful men are especially fond of it. It is only natural that alcohol should have been appreciated in the world of the Wakō.

In the *omoro* songs, several words appear with the prefix *oni* ('devil'). This implies the possession of an unusually strong spiritual power. The founder of the second Shō dynasty, Kanamaru, is referred to as Onisanko, while a priestess who exhibited spiritual power in battle is called Oni no Kimihae. The places where high-ranking priestesses undertook rituals with swords are called Oni-gusuku, while the strong male ruler of Kumejima was "stronger than an *oni*." Another *omoro* song describes an *oniwashi* ('devil eagle'), powerful enough to rule the world, as extending its wings over Sashiki, the base of the earlier first Shō dynasty in the south of the island of Okinawa. The symbolic capture of this 'devil eagle' is what made the foundation of the dynasty possible. We believe that this *oni* is a symbol for the power of the Wakō pirates.

The songs of *Omoro sōshi* are contemporaneous with medieval songs of mainland Japan, but do not fit into any of the frameworks of Japanese literature. This paper illustrates that research on the *omoro* songs from a new perspective may give us hints about the cultural distance between Yamato (mainland Japan) and Okinawa after the founding of the Ryūkyū kingdom.